

優秀賞

父が灯してくれた道

兵庫県 大西光恵

「きつと大丈夫。」いつも父は笑顔でそう語りかけてくれる。私は今でも父の背中を追いかけている。

晩年、父はパーキンソン病を患い、手と足が不自由になり、帰省をしても言葉を交わすことが少なくなつた。神戸に帰る私達家族を窓際から顔をのぞかせてくれ、いつまでも見送つてくれていた父の姿は忘れられない。その日は突然に訪れた。姉からの「お父さん、亡くなつたよ」の一言を勤務先の電話で受け、持つていた筈はずをぱたりと落としたことを鮮明に覚えている。実家で対面した父は、安らかな顔で眠っていた。臨終に立ち会うことができず、ありがとうの言葉を告げられなかつた私は、ただ涙するばかりであつた。その夜、父の夢を見た。父と姉二人で近くの河原に蛍を見に行つた時の夢だつた。父の背中が見えた。「もう泣かなくていいよ。」父がそう言っているように感じた。

父の遺品の中に、何冊かのノートがあつた。それは父の日記であつた。驚くべきことに、あの不自由な手で病院に入院する直前まで毎日、父は文章を書き続けていたのだつた。父は美しい字を書く人だつた。少しずつ字の乱れはあるものの丁寧に日々の思いを書き記していた。自分の病状をうまく医師に伝えられないもどかしさや、優しい看護士さんへの感謝の言葉が書かれている日もあつた。ある走り書きに目が留まつた。生まれつき右耳が難聴のため海軍兵学校の試験に落ちた時に、母に恨み言を言ったことを謝り、頑丈な体に産んでくれた両親への感謝の言葉が綴られていた。涙が止まらなかつた。

私は父の背中を追っている。苦しくても父は毎日、書くことを諦めなかつた。父は教えてくれた。書き続けることのすばらしさを。感謝する心の大切さを。

人生の岐路に立つ時、いつも父は「きつと大丈夫」と背中を押してくれる。父の灯してくれる一筋の道は温かく、限りなく優しい。